

「実践事例集Vol.15」(2018年4月発行)で
紹介している事例を中心に抜粋しています。

(公益財団法人 ソニー教育財団)

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育 保育実践事例サイト
<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>

実践事例集

<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/>

「科学する心を育てる」

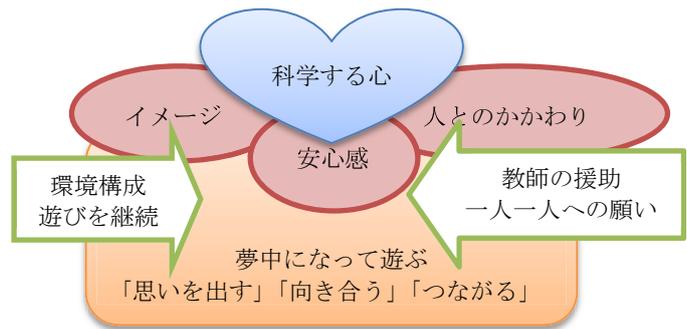
～好奇心や探究心を育むための環境構成，教師の援助を考える～



I. はじめに

1. 昨年度までの取組

昨年度を取組で、子どもたちが人とのかかわりを広げながら、「思いを出す」「向き合う」「つながる」経験を繰り返し、夢中になって遊び、<どんな思いも受け止めてもらえる安心感>を土台に、<人とのかかわり>を深め、<イメージ>を



もって推測したり想像したりする経験が、「科学する心」を育てていく事がわかった。さらに一人一人の興味・関心を探ろうとする教師の援助や願い、遊びを継続するための環境構成が大事であることがわかった。それを踏まえ、2学期以降も継続した飼育、栽培の中で、子どもたちがウサギと話ができる「魔法のペンダント」をつくったり、収穫したサツマイモでサツマイモ屋さんやサツマイモパーティーをしたりなど、保護者や地域の大人も巻き込みながら創造性豊かに夢中になって遊ぶ姿が見られ、自園の子どもたちにとって自然とのかかわりがいかに大切かを感じた。園内の自然環境や栽培計画を見直し、子どもたちがその中でどのような経験をしているのかを丁寧に見取っていくことなどが課題となった。



「リボンちゃんかわいい」

2. 今年度の本園の実態と課題

幼児や家庭の実態としては、家庭の様子が多様化し、幼児が自分の体と心を動かして様々なことを直接体験する楽しさを感じる経験が少なくなっている。それによって、やる前から失敗を恐れたり、しようとしなかったり、わかったつもりになったりして興味を示そうとしない姿や自分で深く考えようとしなない姿なども見られる。私たちは、子どもたちに「自ら」心と体を動かし、自分たちで考え「自ら」生活をつくる楽しさを感じ、好奇心や探究心を育てたいと考える。また、今年度は教職員の異動により、約半数の入れ替わりがあった。その中で、一人一人の教職員が子ども、保護者、教職員同士と信頼関係を築き、安心・安定しながら保育していくこと、経験の浅い教師に、それぞれの教員の持ち味を生かしながら、これまで大事にしてきた保育について伝えていくことは本園の大きな課題である。

3. 「科学する心を育てる」についての考え方と取り組みのテーマ

以上のことより、身近な生き物の飼育や野菜や草花等の栽培、砂や水、泡などの素材の遊びを通して、子どもたちの自分自身のこれまでの思い込みの殻を破る感動体験をしたり友達と一緒に生活を創造したりしてほしい、その中で好奇心・探究心がどのように育まれるのか探りたい。教師が子どもたちの姿をどのようにとらえ、何を願いどのようにかかわるのか、子どもと共に明日への保育をどのようにつくっていくのか考えたい。上記の視点で、エピソード記述したものの中から、本論文では、身近な自然とのかかわりの様子、泡遊びでの様子、園庭の畑での栽培活動の様子について取り上げる。幼児のどのような姿から、その内面をどうとらえていくのかという幼児理解の視点で事例に表し、幼児の姿、環境構成と教師の援助のポイントについて考察する。さらに幼児の姿や教師のかかわりや環境構成を振り返り、見直し、今後の保育計画について考え、保育を改善していきたい。

1. 身近な自然とのかかわりの中で

事例① 《アオムシを育てる事を通して》 3歳児 4月上旬～7月中旬

＜事例までの姿と 教師の願い＞

A児は、入園当初から、体験した事のない事にはいやという姿が多く見られた。A児には、アオムシの飼育を通して、生き物を世話し、保育室で共に過ごす中で、身近に感じ、生き物に興味・関心をもってほしい。その体験が、頭の中で考えすぎてしまわず、何でもやってみようという思いにつながってほしいと考える。

<p>・環境 ☆環境に込めた願い</p>	<p>子どもの姿</p>	<p>♡教師の援助</p>	<p>子どもの姿の読み取り 教師の思い</p>
<p>平成29年4月上旬<嫌いあっちいって></p>		<p>♡「そうやなあ」と声をかけ、ちょっとこわいというA児の気持ちを大切に受け止めながら、「虫も一緒に遊びたいのかなあ」と声をかける。</p>	<p>A児は、入園するまで虫とかかわる体験が少なかったのだと思った。A児は、虫等の生き物に対して、よく分からない、少し怖い、気持ち悪い、という思いをもっているのとらえた。</p>
<p>・子どもの目線に合わせた台を作りその上に虫かごを置く。 ・虫かごの横に本立てを置き「アゲハのせいちょう」の本をたてかける。 ☆アオムシを身近に感じてほしい。 ☆興味をもち、いろいろな事を発見してほしい。 ・テラスに虫かごをもっていく、ふたをあける。</p> 	<p>B児とC児は、「アゲハのせいちょう」の本を見たり、じっくりとアオムシを見つめていたりしていた。 B児とC児は、頭を触るとつのがでる事を知り、「うわあ！」と驚き、「なんか臭いがする」と指を臭いでいた。他の子どもたちも寄ってきて、つのが出る事や臭いのする事を知り興味をもった。 A児は、少し怖い様子で教師の背中にひっつきながら見ていた。</p>	<p>♡アオムシの頭をそっと触ってみる。 ♡「なんかでたね」と驚く気持ちに共感する。「ほんとだ」とB児の気づきに共感し、一緒に臭いをかぐ。</p>  <p>♡「すごいね、つのがでたよ！なんだか臭いもするね」と優しく声をかけながらA児の姿を見守る。</p>	<p>アオムシに興味をもち見ているので、もっと近くで色んな角度からじっくりと見て興味を広げてほしいと願った。触ってみたりじっと見たりする中で、新たな発見をしたり触れ合う楽しさを味わってほしいと願った。</p> <p>A児が自ら興味をもちこの場に見にきた事が嬉しく、A児がいつか自分から動くのを待とうと思った。</p>
<p>平成29年6月24日(土) <とんでいってほしくない></p>		<p>♡「そうだね、広い外につれていってあげようか」とB児の思いに共感する。 ♡「Aくんは、ちょうちょさんにお部屋にいてほしいの?」「ずっと一緒にいた大切なちょうちょさんやもんなあ」とA児の思いを受け止め、気持ちに寄り添う。</p>	<p>B児は、以前園庭で放した体験から、チョウになったから、外に放したいと思ったのだろうととらえた。 A児がチョウを大切な存在と感じてくれた事がとても嬉しく、その思いをしっかりと受け止めたいと思った。</p>

平成29年7月19日(水) <少し触ってみる>			
<p>・セミの抜け殻が園庭に落ちている。 ☆セミの抜け殻2匹を、登園して子どものすぐ目につく机に置いておいた。</p>	<p>クラスの子どもたちは、園庭でセミの抜け殻を見つけては教師に見せて集めていた。 A児は、セミの抜け殻にゆっくりと手を伸ばし、“ちょん”と触った。その後、“ちょんちょん”と何度も触った。</p>	<p>♡「うわぁ！よく見つけたね！どこにあったの？」と子どもの見てほしい気持ちを受け止め、見つけた喜びに共感する。 ♡「Aくんすごい！触れたね！」と、少し怖いながらも興味を示し、触ったA児の姿を受け止める。</p>	<p>子どもたちの沢山探るのが楽しいという気持ちや見てほしいという気持ちを受け止めたい。 A児が、興味をもちセミの抜け殻に触った事に驚き、A児の思いや姿を大事に受け止めたい。</p>

[考察]

好奇心や探究心を育む経験

<動き出したA児>

A児の気持ち悪い、あっち行ってという姿を肯定的に受けとめ、認めてかかわる事で、知らなかった事を知っていき、素直に思いを出すという姿につながっていったと感じた。毎日間近で、アオムシの成長を見てきた事や、他の子どもたちが教師と一緒に虫かごの掃除をしたり、えさを取りにいったりした様子を見てきた事等の体験の積み重ねが、泣きながら「やめて！そこに戻しておいて！」とアオムシからチョウになったことに愛着を感じるA児の姿につながったのだと思った。

<身近な存在に>

子どもたちのよく通る場所、子どもの目線に環境を整えた事で、じっくりとアオムシにかかわる姿につながったと感じた。A児は、教師や他の子どもたちが、楽しそうにしている姿を教師の背中にひつつきながら見ていた。この『見る』という事がA児にとっての興味・関心の示し方なんだと感じた。そして『見る』という体験こそがA児にとって自分の思いを出していく過程の中でとても大切な体験だったと感じた。



保育室でアオムシを育てた体験から、図鑑にのっているキアゲハを指さし、「このチョウを探そう！」という子どもの姿や園庭にチョウが飛んでくると、指をさし「あ！いた！！」と追いかけて喜ぶ子どもの姿があった。この姿を見て、アオムシを育てた体験が、子どもたちにとってチョウが特別な存在になることにつながったのだと思った。

今後の保育計画

まずは、子どもの思いを受け止め、認めてかかわるという事や、できるできないではなく、心の中でおこっている過程を大切にしながらかかわっていきたいと思う。また、A児の初めての事や分からない事にはいやという姿も肯定的に受けとめかかわる事で、A児が素直に思いを出せるようにかかわっていききたい。

チョウになった時、保護者も「綺麗だね」「すごいね！」等と子どもと会話されている姿があった。このような親子のかかわりや、幼稚園での子どもの姿を伝える事も大切にしていきたい。

また、保育室で飼っているウサギに教師がすすんでごはんをあげたり、掃除をしたりなどでみる等、ウサギを大切にしようとする気持ちや愛情が育つように教師がモデルとなりかかわっていききたい。

事例② 《たこさんウィンナーがふくらんだ!》 3歳児 6月下旬～7月上旬

＜事例までの姿と 教師の願い＞

入園した頃から、友達が遊んでいるところを少し離れた場所から見ていたD児。教師の誘いかけにも興味を示さず、知識として知っていることを伝えることで満足しているような様子が気になっていた。E児をきっかけにクラスで馴染みだしたザクロの花を“たこさんウィンナー”に見立てた遊びに興味を持ち始め、この遊びはD児にとって心動かす遊びの一つとなっていた。D児には、本で見たことだけで得た知識だけではなく、実物を見たり、匂いを嗅いでみたり、触ってみたりする体験をして夢中になって遊べるようになってほしいと願っていた。

・環境 ☆環境に込めた願い	子どもの姿	♡教師の援助	子どもの姿の読み取り 教師の思い
平成29年6月15日(木) <お弁当に入れてみよう!>			
<p>・お弁当箱の容器を用意する。 ・お弁当の絵本を置く。 ☆興味をもったザクロの花を使って遊べるように、“たこさんウィンナー”の見立てを活用できるようにした。</p>	<p>たこさんウィンナーをお弁当箱の容器に入れる。 D児はお弁当の絵本の前に捨てきたたこさんのザクロの花を並べる。</p> 	<p>♡一緒におにぎりや卵焼き等のお弁当をつくる。 ♡子どもたちがつくったお弁当を食べるふりをして「とってもおいしい!上手につくれたね!」等の声かけをする。 ♡「たこさんウィンナーがたこさん拾えたね!」とたこさん拾えた嬉しい気持ちに共感する。</p>	<p>ザクロの花を拾ってくるだけでなく、自分たちの身近なお弁当で、ザクロの花を使って遊べるようになってほしい。 自分だけのお弁当が作ることを楽しんでほしいと思った。 たこさん拾えることが楽しいと読み取った。</p>
平成29年6月30日(金) <ザクロはフルーツ!>			
<p>・ザクロの名称の札をつける。 ☆樹木に興味をもってほしいため、親子遠足で行った植物園にあったような、クイズつきの名札をつくった。</p> 	<p>札を見つけて、札の写真や字をじっくりと見る。 E児『『ざくろ』って書いてある!』と驚く。 D児「ザクロってフルーツやねんで」 E児「そうやで!フルーツやで!食べられるんやで!」と話す。 F児「食べたい!」 E児「私も食べたいなあ」と言う。</p>	<p>♡「ほんまや!たこさんウィンナーってザクロになるんやなあ。先生も知らなかったわ!」と気持ちに寄り添い、共に驚く。 ♡「ザクロってフルーツなんや!みんなで食べられたらいいなあ」と気持ちに共感する。 ♡「そうやなあ。食べたいなあ」と気持ちに寄り添いつつ“たこさんウィンナー探し”を続ける。</p>	<p>たこさんウィンナーがザクロということに驚きと気づけたことに喜びを感じていると感じた。 「ざくろ」という文字で見て文字に反応していると思う。たこさんウィンナーがザクロであることを知った3人に教師はぜひとも膨らんできている実物のザクロを見せたいと思った。</p>
平成29年7月3日(月) <膨らんだザクロ>			
<p>・教師が大きく膨らみ垂れ下がったザクロに登園前を見つける。</p>  <p>☆上の方にあったザクロが子どもたちの目線まで垂れ下がってきていた。写真ではなくぜひ実物を見せ</p>	<p>たこさんウィンナー探しを始める。 大きく膨らんでいたザクロを近くで見た3人。 E児「たこさんウィンナー膨らんでいる!」と大きさに驚く。 D児は、「これがザクロになるねん」と見て、指先でつんつんと膨らんだザクロの花を何度も触る。 F児「タマネギみたいだ!</p>	<p>♡探しながら垂れ下がったザクロの付近に行き「みて～」とザクロを持つ。 ♡「大きいな!」と共感する。 ♡D児が自ら興味をもち、ザクロを触ったりしていることからことん自分で見たり触ったりしてほしいと思いあえて見守る。</p>	<p>D児に声をかけて誘うだけでは「知っている」と言っただけで来ないだろう。自然に探しながらザクロの場所まで行くことにした。 D児が触ったことが嬉しかった。硬さを確かめているのかなと思った。自分で感じ取ることを大事にしたいと思った。</p>

<p>たいと思った。</p> 	<p>タマネギたこさん！」と身近なものに見立てる。子どもたちは膨らんだザクロを取りたいとつぶやく。</p>	<p>♡「ほんまや！タマネギにも見えるね！面白いね！」と気持ちを受け止める。 ♡「もっと大きくなるかもしれないよ！」と子どもたちの取りたい気持ちも受け止めつつ、ザクロの生長を見守ることにした。</p>	<p>F 児らしい表現だなと思う。 ザクロがさらに生長して変化していく様子を子どもたちに見せたい。</p>
--	---	--	--

【考察】

好奇心や探究心を育む経験

＜D児にとって本当に必要な体験＞

「ざくろ」の札を見たD児は「ザクロはフルーツ」と知っていた。その知識がD児にとっては大事なことであった。しかし、絵や写真を見て得る知識だけではなく、実際に実物を見たり、触ったり、匂いを嗅いだりする体験がD児にとって本当に必要なことだと感じた。膨らんだザクロを見て、自分の目で見たり、手で触ったりし、感触や大きさ、形と子どもたちがそれぞれに感じたことや気づいたことがあった。特にD児はザクロをよく見て、何度も触っていた。このように自分で体験することがD児にはこれからも必要であると感じる。また、たこさんウィナーの遊びを継続的に楽しんでいたからこそ、大きさや形の違いにきづき、より興味をもつことができたのではないかと思う。3歳児にとって目で見てわかる変化や違い、実際に触れられる環境により、様々な体験が積み重なっていくのだろう。

今後の保育計画

子どもたちと共にザクロの変化を見守っていき、収穫して食べることができるか検討したい。また、5歳児が中心となって育てている園庭の畑にも園全体でねらいを共有し、連携を取りながら、3歳児も水やりなど畑にかかわっていききたい。さらに、季節の移ろいと共に、園庭のモモやドングリ(クヌギ)ができることに気づいたり、触ってみたりして、様々な感触や大きさ、形に出会えるようにしたい。そして、D児には今後も幼稚園にある身近な植物等の実物にたくさん触れて、実物から様々なことを感じてほしい。これまでも楽しんできた探検ごっこを続けて楽しみ、教師と一緒に、見方や考え方、感じ方を広げていきたいと考えている。

【身近な自然とのかかわり事例①② まとめ】

嫌いなものを嫌いでなくなる、知らないことを知るということではなく、これまでの自分を思わず超えていく経験が、好奇心を育てていくのであろう。「虫が嫌い」「知っている(つもり)」という思いは一見、「科学していない心」のようにも思えるが、「嫌い」「知っている」と思えることも大事で、その心を保育者がどのように受け止めていくかが大切である。アオムシを育ててチョウになる感動を体験した子どもたちは、その後に園庭にやってくるチョウへの見方が、育てる前のチョウとは、違うものとなっていると担任は感じている。「親しみを感じる」ことの深まりがある。私たちは好奇心とは「興味をもってやってみようとする」と単純に捉えていたが、体験の深まりと共に子どもたちの見方や感じ方が広がり、好奇心にも深まりがあることに気づいた。また、自然物は一つとして同じものではなく、見方や感じ方に正解はない。どの子どもの思いも一人ずつ違い、その思い全てに共感できる。教師がそれを認めることで、友達の思いを知り見方や感じ方が広がる。その良さを教師が十分理解し保育に取り入れていくことが大事である。

2. 泡遊び

身近で毎日、触れている石鹸を使って遊ぶ事は、ほとんどの子どもたちにとって、抵抗なくできる遊びで、感触が気持ちいいこの時期に泡をつくったり、ごちそうに見立てたりして遊ぶ事を楽しんでいる。同じ素材の遊びで、学年によって違うねらいやどのような経験が好奇心・探究心を育んでいるのか、環境構成の工夫等について事例をもとに考えたい。

事例③ 《泡が出てきて面白い》 3歳児 5月～6月

<事例までの姿と 教師の願い>

G児は初めて泥や砂を触るので、汚れる事に抵抗を感じる姿があった。少しずついろいろな素材の感触を楽しんでほしいと願っていた。そこで汚れが付きにくい泡の遊びの環境を出した。最初は教師が作った大量の泡を触ったり、自分の洗面器に集めてケーキに見立てたりして遊んでいた。洗面器やペットボトルを使って遊んでいたが、手が滑る等扱いづらそうにしている子どもの姿もあった。泡遊びを通して、泡の感触を十分に一緒に楽しみ、やってみたいと思える遊びをたくさん見つけてほしい。そして、やってみたい事をどんどんやってみてほしいと願っている。

・環境 ☆環境に込めた願い	子どもの姿	♡教師の援助	子どもの姿の読み取り 教師の思い
平成29年6月12日 (金) <ゴムべらに興味をもつ>			
<ul style="list-style-type: none"> ・泡を作ってタライに入れておく。 ・取っ手付きコップやゴムべらを出す。 ・子どもが使いやすい高さの机の上に用具を置く。 ・コの字型に机を配置する。 ☆扱いやすく、ケーキのイメージがより広がってほしい。 ☆用具をワゴンから視界に入りやすい場所に置くことで、いろいろな用具にも興味をもってほしい。 ☆周囲で遊んでいる人の存在を感じながら遊んでほしい。	G児はゴムべらに興味をもち、ゴムべらで泡を混ぜる事を楽しむ。 周囲で遊ぶ人の様子を見て同じ用具を使ってみたり、同じように泡を集めてみたりして楽しむ。	♡泡の遊びに誘いかけ、教師も手を携えて一緒にゴムべらを持って遊ぶ。 ♡泡が少なくなってきたら泡を作る。 ♡子どもたちが何度も泡をすくったり、移し替えたりするのを一緒に楽しんだり見守ったりする。	泡遊びに少しずつ興味をもってきている。更に泡の感触を楽しめるように、やってみたいと思える環境を用意したい。
平成29年6月23日 (金) <G児泡マシンと出会う>			
<ul style="list-style-type: none"> ・ペットボトルを半分に切って逆さにしたもの(泡マシン)を用意する。 ☆今まで見た事のない動きの泡を見て更に楽しんでほしい。 ・ゴムべらをG児に手渡す。	G児は教師と一緒に泡遊びを見に行く。泡マシンから泡が出てくる様子を教師と一緒に見る。 教師と一緒にゴムべらで泡をすくい、泡マシンに入れてみる。泡が出てくる様子をじっと見つめ、次は自	♡G児を誘い泡マシンの場と一緒に行く。 ♡泡マシンに泡を入れて出てくる様子をG児に見せ、「泡がうにゅーって出てきたね!」とまずは教師が泡の様子を楽しむ。 ♡G児にゴムべらを渡して、「Gちゃんも一緒にやろ	G児も一緒に泡マシンを見つめているので、新たな泡の動きに興味をもっているのとらえた。 G児にも今まで見た事のない泡の様子を楽しんでほしい。G児が興味をもったゴムべらを用意すればやってみたいと思うか

<p>☆興味をもっていたゴムべらを使う事で、もっとやってみたいと感じてほしい。</p> <p>・G児の視界に入りやすい場所にお玉を置く。</p> <p>☆目や手の届く場所にあるもので遊ぶのが3歳児であると考え、目の届きやすい場所にいろいろな用具を置く事で、違う用具も試してみようとしてほしい。</p> 	<p>分で泡をすくって泡マシンに入れ、上からや下からいろいろな角度で泡の様子を見て楽しむ。教師の言葉に笑顔で頷く。</p> <p>何度もゴムべらで遊んだ後、近くにあったお玉を持ち替えて泡を入れてみる。水分の多い泡が勢いよく流れ、勢いに驚いて後ずさりをする。再びお玉で泡をすくい、勢いよく流れる泡を眺めた。</p> <p>ゴムべらに持ち替えて泡を入れ、ゆっくり出てくる泡の様子を見て笑顔になる。</p> <p>何度もゴムべらで泡を入れ、時折手で感触を確かめてはゆっくり流れる泡の様子を笑顔で見つめていた。</p>	<p>う！」と誘い、一緒にゴムべらを持って泡をすくう。</p> <p>♡ゴムべらから手を離し、G児が自分でやってみたい事を実現できるように見守る。</p> <p>♡「また泡でできたね！面白いね！」と話し、泡の様子を楽しむG児の思いに共感する。</p> <p>♡新しい用具もやってみようとするG児の姿を見守り、何を楽しんでいるかを見る。</p> <p>♡「ソフトクリームみたいだね」と言葉をかけ、G児の楽しむゆっくりとした動きの泡の面白さを教師も一緒になって楽しむ。</p>	<p>もしれないと感じた。</p> <p>教師と一緒にやってみる事でG児がやってみようとするきっかけになると考えた。</p> <p>泡をじっと見つめる様子から、泡の動きを楽しんでいるととらえ、自分でやってみる姿を見守る。やってみて楽しいというG児の思いに共感し、面白さを共有したい。</p> <p>G児はお玉ですくった泡が勢いよく出てきた事に驚いたが、ゴムべらですくった時と違う泡と感じたと読み取った。違いを感じる事がもっとやってみたいと思う事につながっていくと感じた。</p> <p>教師に自分の感じた面白さを認められる事で、更に様々な事をやってみてほしい。</p>
--	---	--	--

[考察] 好奇心や探究心を育む経験

泡遊びを更に楽しむためには、新しい環境を用意して、「これはなんだろう？」と思えるようにする必要があったと考えた。G児は泡マシンを見た時に、今まで見た事のない環境に興味をもち、初めて見る泡の動きを面白いと感じたのだろう。そして、泡マシンをつかった泡遊びをとっても楽しく感じたから何度も繰り返して遊んでいた。3歳児では、面白いと感じた事を繰り返しやってみる経験が好奇心と探究心を育んでいくと考えられる。

環境構成と教師の援助のポイント

新たなアイテムを用意しようと考えた時に、他園の研究保育に参加した。その園ではペットボトルを半分に切って逆さにしたもの（泡マシン）で遊ばれていた。泡を切り口から入れると注ぎ口から泡が出てくる仕組みだった。その環境が楽しそうだと感じ、保育に取り入れる事にした。遊びの環境も毎日同じではなく、子どもの姿に合わせて子どもが扱いやすい用具やイメージが広がる用具を用意し、日々少しずつ環境に変化をつける事で、子どもが更にやってみたいと思うという事が分かった。また、すくう、流す、ためる等様々な遊び方を教師が想定してその特徴に合った用具を用意する事も重要であった。

今後の保育計画

泡の感触を十分に楽しんで遊んできたので、更にいろいろな素材の感触を感じて子どもの世界を広げていきたい。今後の遊びでは新聞紙やドングリのプールを作り、中に入る等で感触や音を楽しみたい。また、新聞紙と水を混ぜて感触の変化を楽しんだり、坂道を用意してドングリを転がしたりする等、いろいろな遊びの中で自分のやってみたい事をどんどん楽しむ事ができるようにしていきたい。同じ遊びの中でも少しずつ変化を付けたり、周囲の人が遊んでいる姿を感じられるような環境を整えて楽しいと感じた事を繰り返す事ができるようにしていきたい。

事例④ 《見て、シャボン玉できた》 4歳児 6月

＜事例までの姿と 教師の願い＞

色水遊びで、自分なりに遊ぶ姿が見られていた。よりいろいろな素材で遊ぶ事を楽しんでほしいと思い、石鹼や泡遊びの環境を出した。また、石鹼は身近な素材でもあり抵抗がなく遊び始めやすい素材でもあるので、自分なりに様々な事を発見し遊び込む事で、工夫をしたり、新しい事を発見したりする楽しさを味わう事ができるのではないかと考えた。泡をつくっておくと、集める事を楽しんだり、感触を楽しんだりしていた。そして、徐々に自分たちで欲しいものを教師に要求して遊ぶ姿が見られるようになった。また、泡も自分たちでつくるようになり、どのように泡をつくったらよいか、その泡をどうやって集めたらよいかを自分なりに試すようになった。

・環境 ☆環境に込めた願い	子どもの姿	♡教師の援助	子どもの姿の読み取り 教師の思い
平成29年6月6日(火) <泡を集めるのが楽しいな>			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 囲む事のできる机の置き方にする。 ・ 穴開きお玉やへら、絞り袋を出す。 ☆友達の姿に刺激を受けたり、共に遊ぶ事を楽しんだりしてほしい。 ☆泡の感触を楽しんだり、試したり発見したりしてほしい。 	<p>友達の姿を見て、同じようにつくってみる。</p> <p>様々な道具を使って、泡を集めたり、泡立てたりして楽しむ。</p>	<p>♡側にいて、子どもたちの発見に共に喜ぶ。</p> 	<p>友達と一緒に遊ぶ事を楽しみ始めているので、友達の姿を見たり、思いを共有したりしながら、より楽しさを味わってほしいと考えた。</p>
平成29年6月21日(水) 雨 <色水と石鹼で遊ぼう>			
<ul style="list-style-type: none"> ・ テラスに色水遊びの場を作る。 ・ 石鹼や容器等の用具を相談して出す。 ☆雨のため、いつもの場(園庭)には準備できないが、遊びを楽しめるようにしたい。 ☆子どもたちからの思いを大事に受け止めた。 	<p>H児「一緒に色水遊びしよう」友達を数人誘う。</p> <p>色水を混ぜたり移したりして遊ぶ。</p> <p>H児「先生こんな色(緑色)になった」</p> <p>I児「H君、どうやったら緑色になったん」</p> <p>J児「私は紫色！」</p> <p>H児「Iちゃん、これとこれ混ぜたらできるで」と伝え、I児もやってみる。</p> <p>H児は、透明の容器に入れた色水の上に泡を乗せ、横から見て、「上と下の色が違う！」と発見する。</p> <p>I児・J児「ほんまや！」一緒にのぞき込んでいる。</p>	<p>♡遊びの姿を見守る。</p> <p>♡「ステキな色！」と、思いを受け止めたり、共感したりする。</p> <p>♡「ほんとだね」と、短く声をかけ、子どもたちが伝え合ったり、共感し合ったりする姿を見守る。</p>	<p>子どもたちで遊びの場をつくり、自主的に遊び始めているととらえた。今までつくった事のない色ができた事を発見し、楽しんでいるととらえて、認める。</p> <p>友達の姿に刺激を受けて、自分なりに思った事を聞いたり、話したりしている。友達同士で楽しむ事で、遊びが広がっていると感じた。</p> <p>子どもの思いに共感したり、認めたりしてかかわる事でより遊びが広がると考えた。</p>
平成29年6月21日(水) 雨 <泡をたくさん集めたい>			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 新しく粉ふるいや泡立て器、容器等をいつもと同じ場所に置く。 ☆自分で使いたいものを選んで遊ぶ事を楽し 	<p>K児とL児は、一緒に泡づくりを始めた。</p> <p>K児は、水の中に石鹼を入れてかき混ぜて泡をついたり、泡立て器で混ぜて</p>	<p>♡遊びの姿を見守る。</p>	<p>自分で遊びたいと思いをもちて遊び続けた事で発見を積み重ね、その発見をいかしながら遊ぶ事を楽しんだり、友達の様子を見て、取り</p>

<p>んでほしい。</p> 	<p>滑らかにしたりする事を楽しむ。 L児もK児と同じように石鹼と水で泡をつくる。すると泡がたくさんでき、K児「いっぱいできた」 L児は、触れてみて「フワフワやな」と伝える。 L児は、泡だけを集めようと、粉ふるいで泡を容器に移す。ふるいで泡がたくさん付き移せなくなり、泡を取りたくなり、振ったり手で拭いたりするが上手くいかない。次に、息を吹きかけると、泡が飛んだ。 K児・L児「うわー」 L児「先生見て、シャボン玉できた」 2人でその後も泡を飛ばす事を楽しんだ。</p>	<p>♡少し離れたところから、見守る。 ♡試す姿を見守る。困っているような様子が見られたときには、声をかけられるようにする。 ♡伝えてきた言葉を受けて、「すごいね。シャボン玉できた」と答えた。</p>	<p>入れたりしている姿ととらえた。 2人でいるからこそ、じっくり思いを伝え合っ て遊んでいると感じた。 泡を粉ふるいから取りたい思いからじっくりと様々な方法を試していると読み取った。 泡が飛んだ様子を見て、今までの経験と結びつけ、シャボン玉とつながったととらえた。 教師に伝えたいほど楽しい発見した事を認める事で、より2人で遊ぶ事を楽しめるだろうと考え、かかわった。</p>
---	---	--	---

[考察]

好奇心や探究心を育む経験

4歳児では、発見した事を積み重ねたり、新しい事に気づいたり、知ったりするという事も遊びを楽しむ要素である事がわかった。また、様々な発見をし、発見を積み重ね、その発見をいかしながら遊ぶ事も楽しんでいる。他にも、偶然に起こった事象をこれまでの経験とつなげる事で、より思いが膨らみ楽しむ事ができる事もわかった。4歳児のこの時期、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じ始め、友達のつながりが広がり始めている。そんな友達と一緒に楽しんだり、同じ思いをもって遊んだりする事で、遊びがつながったり広がったりしていく事がわかった。

環境構成と教師の援助のポイント

繰り返し遊ぶ事のできる場や時間を保障していく事が大事である。しかし、今回のように時には自分たちで遊ぶ場をつくる事で、より遊びを楽しむ事ができるようになる事もある。また、新しい用具を出す事で、子どもたちはより試したり、様々な事に気づいた事で自信をもち、自分なりにめあてをもったり、試したり、友達と同じ思いをもって遊ぶ事を楽しんだりする事がわかった。

また、友達と顔を見合う事のできる環境をつくり、友達と刺激し合っ
て遊ぶ事で、より試したり、友達と同じ思いで遊んだりする。その時、教師は共に遊ぶ事はもちろんであるが、共に遊びの場を共有しながら見守り、必要な時に言葉をかけたり認めたりする事も大事であるとわかった。

今後の保育計画

友達と一緒に遊びつつ、十分に試しながら遊ぶ事を楽しめるように、机や用具の置き方等を工夫し、顔を見合わせ、友達の刺激を受けて遊ぶ事ができるようにする。その時に、一人一人がじっくりと遊ぶ事のできるスペースも確保する。

また、子どもたちが遊びながら試したり、発見をしたりできるように、子どもたちの身近にあるドングリで試したり比べたりなど自分なりに工夫ができるような場をつくって遊んだり、何度もつくり変える事のできる粘土で、全身を使って試したりする事を楽しめるような遊びも取り入れていく。

事例⑤ 《私の泡 もっとやってみよう!》 5歳児 5月下旬～6月

＜事例までの姿と 教師の願い＞

5月下旬、M児は泡遊びに興味をもった。始めは遊びに入りにくそうにしていたが、仲の良い友達と一緒に、側にいた友達につくり方を聞くと、洗面器に削った石鹸の粉と水を入れ、泡立て器でかき混ぜる事を楽しんでいた。翌日M児は再び「やりたい」と泡遊びを始めた。片づけの時間になると、「置いておく」と泡の入ったボウルを棚の上に置いた。M児は、自分が遊びたいというより、仲の良い友達が遊んでいるから一緒に遊ぶ事で安定しているような姿が多く見られた。そこで泡遊びを通して自ら環境にかかわり、自分の思いを出しながら遊ぶ楽しさを味わってほしいと願った。

・環境 ☆環境に込めた願い	子どもの姿	♡教師の援助	子どもの姿の読み取り 教師の思い
<p>平成29年5月24日 (水) <続きをしたい!></p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達と集い、遊びの場で囲って遊べる机を置く。 ・おろし器、泡立て器、計量カップ等様々な用具を出す。 ☆互いの顔が見え、やっている事を伝え合う事のできる距離間で机を置く。 ☆それぞれの楽しみ方に応じた用具が選んで使えるように用意する。  <ul style="list-style-type: none"> ・つくった泡を置いておく場所を作る。 ☆自分のつくったものを大切にしたい思いを受け止め、続きができるように置き場所を準備する。 	<p>M児は自ら「やりたい」と昨日の続きで削った石鹸をボウルの泡に加えては、泡立て器でかき混ぜる。</p> <p>M児は「見て」と嬉しそうに言う。</p> <p>周りの子どもたちがM児の泡に注目する。</p> <p>N児は驚いた様子で、「Mちゃんみたいのつくりたい!」と言う。</p> <p>M児は実際にやって見せ、N児は真似をしてつくる。</p> <p>M児は繰り返し泡をかき混ぜ、クリーム状になった泡をすくい上げ確かめる。</p> <p>M児は泡を大切に置く。</p> <p>M児は少し恥ずかしそうに微笑む。</p>	 <p>♡「Mちゃんの泡、クリームみたいで気持ちいいね。あ、落ちない!」と言い、泡を指につけてひっくり返す。</p> <p>♡「Mちゃんに教えてもらったら?」とN児に伝える。</p> <p>♡降園時、クラスで教師がM児の泡を知らせる。</p>	<p>M児にとって、試して遊べる環境が、仲の良い友達と一緒にの中でも自分の遊びを見つけられるのではないだろうかと感じた。</p> <p>M児が楽しそうに何日も継続して自ら遊んでいる今している遊びを十分に認めたいと思った。</p> <p>自分の思いを出して動く姿が少ないM児が、自分のしている事を友達にすごいねと認めてもらう中で、自信をもってほしいと思った。</p> <p>M児が一生懸命つくっている泡をみんなにも知ってもらい自信につなげて、明日もこの遊びを楽しんでほしいと願った。</p>
<p>平成29年6月8日 (木) <どうなるかな?></p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもがつくった泡を残すための容器をペットボトルで作ったり比較したりできるようにする。 ☆よりいろいろな泡に目を向けられるようにする。 	<p>少し水を加えたり、削った石鹸を少しずつ加えたり、真剣な表情で泡の続きをつくる。</p> <p>「こんなんだった」「見てー」とクリーム状やトロトロになった形状の違う泡を嬉しそうに友達と見せ合う。</p>	<p>♡自分なりに試行錯誤しながら遊ぶ姿を見守る。</p> 	<p>自分なりに試したり、考えたりしてつくり、つくり方によって泡が異なる事に気づき始めていると読み取った。</p> <p>真剣な表情になるほど集中してつくった自分の泡に喜びを感じていると思った。</p>

平成29年6月19日(月) <私の泡 こうしたい>	
<p>・へら、生クリーム絞り、ポイ等新しい用具を出す。 ☆より試して遊べるように用具を追加する。</p>	<p>とろっとした泡やきめ細かい泡等様々な泡をつくる姿が見られる。 M児は「先生、触って」と満足そうな表情で言う。</p> <p>友達と互いの泡を触り合う。 M児は周りの友達の言葉を聞いて驚いた表情を見せたり、微笑んだりする。 M児は泡の状態を確認しながら黙々と自分の泡をつくる。</p>
<p>♡「Mちゃんの泡は、昨日よりしっかりしているね」とM児の思いを汲み取って言う。 M児が一生懸命つくっている角が立つようなきめ細かい泡を認める。</p> 	<p>自分なりにこんな泡をつくりたいという思いをもつようになってきていると感じた。 M児はきめ細かい泡をつくる事を目指しているようだ」とらえた。</p> <p>実際に触ったり、声を聞いて見たりする中で、自分の泡と比較し違いを感じていると読み取った。</p> <p>自分の泡にこだわりをもってつくっている事を感じた。</p>

[考察]

好奇心や探究心を育む経験

泡遊びは、石鹼や水を加える量や混ぜ方によって状態が変化し、全く同じものにはならない。そして、何度も試す事ができる。5歳児は、友達と集う事で、自分の泡と友達の泡を客観的に比較し、違いに気づき互いに認め合う姿が見られた。そして、継続して遊ぶ事でより泡に興味をもち、周りにはいる友達へも目が向き、こうしたらどうだろうかと試したり、こんな泡をつくりたいと目標をもって取り組んだりし、意欲的に遊ぶ姿につながった。

環境構成と教師の援助のポイント

固定した場所に環境を作った事や続きができるよう置いておく場を作った事が、継続して遊ぶ楽しさを味わう事につながった。一旦終わっても続きができるという環境が、子どもたちにとって次への期待をもって遊べる場であったのだろう。また、友達と机を囲んで集い互いに刺激し合える環境の中、様々な用具を整え、したいと思った事をじっくりと試せる事が大切である。

今後の保育計画

泡遊びで残しておける場を作った事で、水分が蒸発し泡の形状が変化する事を感じる姿等も見られた。それぞれが気づいていたが、言葉で伝える事はなかったなので、今後一人ひとりの気づきを友達と伝え合う機会をもっていきたいと思う。また、泡からシャボン玉ができる事に気づく姿も見られ始めたため、様々な用具を追加した。その中で、どのような液にすると割れにくいシャボン玉ができるのか、何を使ったらどんなシャボン玉ができるか等、より試して遊べる環境を作った。しかし、子どもたちは泡の探究に興味があり、自分の泡にこだわりをもち継続してつくることを楽しんでいた。

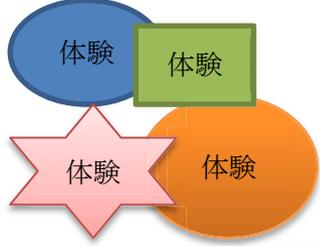
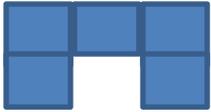
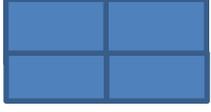
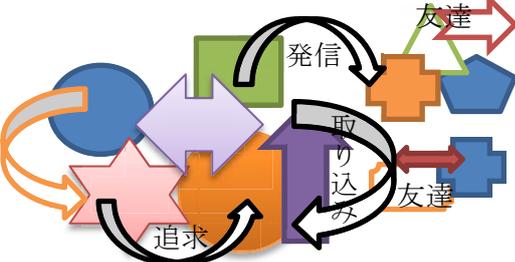
M児は、泡遊びに夢中になって遊んだ頃から、苦手なプール遊びでも挑戦する姿が見られるようになった。M児のやってみようとする思いを受け止め、自分の思いを更に出して遊べるよう見守っていききたいと思う。



【泡遊びのまとめ】

泡遊びの事例より、考察することで見えてきた各学年の自ら心を動かし探究している姿を育む経験や環境構成のポイントなどの特徴をまとめると次のようなことが見えてきた。

表1 学年別探究する姿及び環境構成

	自ら心を動かし探究している姿	環境構成のポイント	<机の配置>
3歳児	<p><楽しいことを繰り返す> 目の前にあることを楽しみ、楽しいことを繰り返す中で、様々な体験を蓄積させていく。</p> 	<p>○子どもがより自分のしたいことをできるように、握ったり持ったりしやすい扱いやすい用具（取っ手付きコップ等）や、ごっこ遊びのイメージがわかりやすい身近な用具（ゴムべら等）を用意する。 ○用具を一か所にまとめて置かず、子どもの目や手の届く机の上などに用具を置く。 ○子どもが更にやってみたいと思える新たな環境を用意し様子を見る。</p>	 <p>コの字型にすることで、ものや人との距離を短くし、周りにいる人を側で感じつつ、ものにすぐ手が届き、一人で遊ぶことを楽しめる配置にする。</p>
4歳児	<p><試すことが楽しい> これまでと違うことや自分の知らないことなどを発見する喜びを感じたり、偶然起こった出来事をこれまでの体験と関連付けたりする。自分なりのやりたい目的をもって様々な方法を試してみようとする。</p> 	<p>○多くの子どもたちが集えるように広い環境を用意する。 ○子どもが楽しんでいることをより楽しむことができるよう（泡をつくる、泡を使って遊ぶ、泡を集める等）豊富な種類の用具（泡だけを集められるお玉、様々な布等）を用意する。 ○用具や材料を分類して準備する。</p>	 <p>友達と向かい合って遊ぶことができる配置にする。刺激をし合ったりしながら、自分自身で試すことのできるスペースがあるようにする。</p>
5歳児	<p><自分と友達を客観的に分析> 友達のしていることと比較したり友達にやって見せたり確かめたりして友達に認められることがさらなる探究心につながる。継続することで変化を楽しみ、自分の理想を追求したり極めようとしたりする。</p> 	<p>○遊びを継続し深めることができるように遊びの場を固定して、いつでも遊べるようにする。 ○つくった泡を残すことができる容器や置く場所をつくり、自分の泡に名前をつけて大切に置き、継続して遊べるようにする。 ○自分のものを追求できる（自分の理想の泡をつくる）様々な種類の用具（おろし金、計量カップ等）を用意する。</p>	 <p>顔の見える距離で、やっていることを伝え合うことのできる言葉を交わし合える距離間を考慮した配置にする。</p>

泡遊びの様子から各学年の探究の姿をとらえ、その時期に楽しんでいる姿から必要な環境を用意することで、環境に積極的にかかわり、やりたいことの見通しをもって粘り強く取り組もうとしたり、次への意欲をもったりする姿が見られた。また、人とのかかわりを深めるには、発達に応じたものや人との距離があることがわかった。自分なりに試行錯誤し、心を動かして遊びを楽しみ探究している姿は、「主体的・対話的で深い学び」と言えるのではないだろうかと思う。

(中 略)

Ⅲ. まとめ

1. 実践の全体考察

事例より好奇心や探究心を育む経験について以下のようにとらえた。

<自己を超えて育まれる好奇心・探究心>

私たちが、エピソードに書きたい子どもの姿や遊びは、これまでの子どもの姿から課題をとらえ教師が願いをもち少しずつ動き出そうとする姿や、これまでとは違う遊びの楽しさを感じている姿、その子どもらしさがよりいかされている姿などであった。事例に書く事で本園の子ども課題がより明確になった。未経験の事への不安、知識と体験がアンバランス、一人では不安、周りが見えないなどである。そのような子どもたちの「科学していない心」のように見える姿を教師が肯定的にとらえ、願いをもってかかわる事で、子ども自らが、過去の自分自身を乗り越えて、心を動かし遊びを楽しむ中で、好奇心・探究心が広がり深まっていく。

事例より環境構成のポイントについて以下のようにとらえた。

<園庭の自然環境を生かす事>

幼稚園の園庭は子どもたちにとって貴重な自然体験の場である。日常に当たり前にある環境を、教師自身が、そこにそれがある意味や子どもたちにどのような経験となる事を願うのかなど繊細にとらえていく事が必要である。

<発達に応じた用具・材料・環境構成>

泡の遊びで、これまでも、学年に応じて用具など環境を整えていたが、記録を残し振り返る事で、より、その学年の特徴をとらえて、遊びにいかす事ができた。

<自分たちで作り出し、みんなで楽しむ雰囲気>

今年度、畑の経験を子どもたちとどのようにしていくかを考えた時に、子どもたちが必要だと思える畑をつくりたいと思った。園内共通のイメージをもち、子どもたちが自分たちで何もない所からつくるといふ、みんなで楽しむ雰囲気が子どもの心を動かしていった。

2. 考察に基づく課題と今後の方向性・計画

<園庭、地域（京都御苑、鴨川）の自然環境等のさらなる活用>

園庭の木々、栽培物などまた、地域の資源について教師自身が関心をもち保育に積極的に取り入れ、保護者、地域と協同し、子どもたちの感性を揺さぶる体験を充実させる。また、園庭の築山の環境をどのように活かしていくか検討する。

<栽培に関する全体計画の見直し・作成>

「平成29年度栽培計画」を本園の教育活動に位置付け、教育目標とのかかわり、各学年のねらいや内容、子どもたちが経験している事について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置きながら、その時期にふさわしい「主体的・対話的で深い学び」を意識化して見直し、「中京もえぎ幼稚園栽培に関する全体計画」の作成を目指す。

研究代表・永本多紀子 研究同人・奥野雅子・小野未音子・小野寺由起・高濱優衣子・高村美沙・中村奈央・土居里己・中東静香・畑中悠希・外藪知子・松尾香菜子・水島正恵・森希美子・脇本久美